

野上豊一郎

漱石先生と謡



漱石先生と謡



謡は或る時期に於いてはたしかに先生の生活の可なり  
 重要な一部分であった。丁度、書や画がそうであったと  
 同じように。ずっと以前、熊本時代に宝生流（かみがかり上掛）  
 を稽古して居られたそうだが、その頃のこととは私は知ら  
 ない。本式に稽古を始めたのは明治四十一年頃で、宝生  
 新氏（しもがかり下掛宝生流）が早稲田南町の家まで出かけて教  
 えていた。勧めたのは高浜虚子氏であった。私も高浜氏  
 に勧められて始めたのであるが、安倍や私の始めたのは

先生より少しおくれていた。安倍の方が私より半年位早かったかも知れない。小宮も始めたが、小宮はもっと後である。鈴木と森田は決して謡の仲間入をしなかった。寺田さんは子供の頃、家で少しばかりやらされたことがあると云っていたが、謡ったのを聞いたことはない。松根君は早くから観世をやっていて、器用にうたっていた。そういった連中が先生の周囲にいて、機会さえあればよく謡った。一時は木曜会が謡会になりそうな時期もあった。こまるのは森田や鈴木で、つまらなさそうな顔をして聞いていたり、ひやかしたりしているが、後では茶の

間の方へ遁げ出して行くことがよくあった。先生は初めのうちはおもに虚子さんを相手に、また東洋城君を相手に謡っていた。たまに坂元君、皆川君などと謡うようなこともあった。われわれも稽古が少し進んでからは一緒に謡って貰った。美声で、声に幅があり、癖はあるが節扱いが器用で、ちよつと追っ付けそうに思えなかった。謡をうたったり、書や画をかいたりすると、その間は俗世間の苦痛が忘られるというようなことをよく云い云いして居られたが、私は先生が屢々しばしば一人で謡をうたっていたのを知っている。日に依っては、午前に謡い、午後に

謡い、更にまた晩にも謡うといったようなことさえあった。「日記」にもそういうことがちよいちよい出て居る。

例えば明治四十三年六月の或る日、胃潰瘍の嫌疑で外出歩行を禁ぜられ、病症のはつきりするまで謡もやめた方がよいと云われて病院から帰った日でさえ、読書しているうちに眠くなつたからと云つて「富士太鼓」をうたい、晩食後また「花月」をうたつた。それから数日後に病症が決定して入院したのであるが、健康がそんな風になつていながら、而かも一人で一日に二番謡つたりするのは、乱暴と云えば乱暴である。御自分でも「是で悪くなれば



自業自得也」と書いていられる。

「花月」といえば、「花月」は先生の好きな謡の一つであった。殊に小唄が気に入っていたように思う。その前の年の夏、「それから」を書いていた頃、或る日、松根小宮両君が先生の家泊り、翌日炎暑の酷烈を物ともせず、朝三人で一番、ひるからまた一番うたい、そうして晩には先生が一人で一番うたったことが「日記」にあるが、その時の謡がまた「花月」であった。

いつだったか、謡ではどんな物がお好きですと聞いたら、修羅物しゆらものが気持がよいと云われたのを記憶している。

修羅物も公達物きんだちものの多少優艶な調子きよつねのものを好んで謡われた。  
 「清経」ただのり「忠度」みちもり「通盛」などはよく一緒に謡った。  
 「朝長」ともなが「巴」ともえなども好きな部類に属していたように  
 思う。どつちかというと、先生は少しいかものぐいの傾  
 向があつて、「角田川」すみだがわ「大原御幸」おおはらごこう「花筐」はながたみ「安宅」あたかな  
 ども割合に早く片づけてしまった。おれは趣味でやるの  
 だから、月並な順序などに拘泥しなくともよいという腹  
 であつたかも知れない。我々の清嘯会せいしようかい（宝生新氏と  
おのえもとたろう尾上始太郎氏とを教師とする稽古会）が神田錦町三丁目  
 の高野金重氏の家を稽古場せうこじやうにしていた頃、それからその

向<sup>むかい</sup>の岩藤という家の二階を借りて、稽古場<sup>きこじょう</sup>にしていた頃、よく謡本をかかえて先生も稽古に見えたが、或る日宝生さんの前に坐って「砧<sup>きぬた</sup>」を出すと、これをお始めになりますか、と宝生さんがにやにや笑った。むずかしけりやよしましうか。なに、やりましう、どれも同じことです。と云ったような調子で始めた。

謡会というものは何処<sup>どこ</sup>へ行っても厭味な空気のありがちなものだが、その点われわれの会は実にさっぱりしていた。これは自慢してよいと思う。つまりお互い下手をまる出しにして、下手で鎚<sup>しのぎ</sup>を削ろうという意気込であ

ったからだ。会の出来たのは四十二年の春であつたが、三月下旬、西神田倶楽部で（たしか第一回の）謡会を催し、ほやほやの競進会をやつた。番組は初心者の寄合所帯だから、番組らしい番組になる筈はない。「紅葉狩」

（安倍能成）、「三山」さんざん（小宮豊隆）、「清経」（夏目漱石、

永田博）、「七騎落」しちきおち（菅能近一）、「舟弁慶」（安倍能成、

野上豊一郎）というような具合で、番外として「蟬丸」

（シテ茅野良太郎、ツレ高浜虚子、ワキ河東碧梧桐、ワキツレ宝生新）、これだけが先ず模範謡という格であつた。その時の謡会を先生が評して、斯う「日記」につけ

てある。——「皆々初心。高野さんは御経を上げる様な声を出す。菅能さんは応接をするような言葉を使う。天下斯かくの如き幼稚なる謡会なし。その代り誰も通つうをいうものなく、至極上品也。」之は正に適評である。虚子、碧梧桐両氏の謡は幼少の頃からやっていて、度々舞台にも出て、手に入つたものであつたが、我々と来ては全くものになつていなかつた。小生はどうかというと、それより十日ほど前、東洋城君の寓居（その頃は赤坂見付の風呂屋の奥に在つた）で、先生、山崎楽堂、主人及び小生四人で、風のひどい晩であつたが、「清経」「桜川」「舟

弁慶」をうたった。その時の先生の批評がいけない。

——「東洋城は観世、樂堂は喜多、きゆうせん白川と余はワキ宝生也。従つて滅茶苦茶也。白川五位ごい鷺さぎの如き声を出す。樂堂の声はふるえたり。」実を云うと、それに相違はなかつたのであるが、斯ういう日記が発表されてしまうと、今以つて五位鷺のような声を出しているようで、甚だ人聞きがよくない。併し今更不平の持つて行き場がないので困っている。

その頃は、先生の日記を見ても、われわれの日記を出して見ても、毎日のように謡とか能とかいうことが書い

てあり、今から考えると少しどうかしていはしなかった  
 かと思われる位熱心であった。それだけ幾らか進歩した  
 と見えて、先生の批評も変って来ている。同じ年の五月  
 二十八日の条下には、おひるから西神田倶楽部の清嘯会  
 素謡会に出席した記事がある。番組は「関原与市」「桜  
 川」「紅葉狩」「融とおる」「猩しやうじよう々」、相変らず体ていを成さない  
 番組であるが、先生は「桜川」のシテをうたわれた。安  
 倍がそのワキで、私は「融」のシテであった。その日の  
 「日記」の中の先生の評。——「諸君皆上手になる。高  
 野さん丈だけが相変らず念仏の様な節を出す。」云々。

その頃の謡頻ひんぱん繁の状態は先生の「日記」や「書簡」を見て大体わかることであるが、入院とか長い旅行とかの時期を除いては、時に多少の濃淡はあつても、殆んど謡と無関係で過ぎされる月はなかつたと云つてもよい。それほど先生は熱心で好きであつたが、師匠の宝生さんはとにかく稽古を怠りがちであつた。待ちきれなくなつて、先生の方から清嘯会の稽古場へ出かけて来ることも珍らしくなかつた。或る時などは、たしか四十二年の五月頃であつたが、遂に我慢しきれなくなり、弟子の方から師匠へ手紙を出して以後稽古をことわると通告した。併し、



その通告の手紙と入れちがいに宝生さんが早稲田南町へ出かけたので、実はさつき断りの手紙を上げた所だというのと、それはどうもと云ったきりで、また稽古が始まった。これは先生と宝生さんの性格を知った者には、ふたりの面目が躍如としていて微笑される。

宝生さんの忙しい時には、故人となつた尾上始太郎氏が代稽古に行くことがあつた。先生から虚子さんへ宛てた手紙にもあるが、私にも或る時、君、尾上という人はうまいねと云われたことがあつた。尾上さんの謡は実際私も推賞していた一人である。それから一と頃は、まだ

十八、九の少年であつた古鍛冶剛君こかじが代稽古に行つていた。これは謡がうまいといふのではなく、教わつて覚えてゐることを正直にやるだけであるが、堅苦しくて融通のきかない性質だけに、教わる方で少しでも調子がわるにいと、ぴしぴしとやつつけた。漱石先生この少年の前では子供のように取扱われていた。併し、先生の方でもあれはよい。これからあれを寄越してくださいと、宝生さんに云つたほど気に入つていた。

先生の謡の調子は、先生の画の如く箇性的であつた。上手かというと、上手であつたとは云えないが、下手か

というと、決して下手でもなかった。音量は十分にあり、つやのある、密度の多い声柄であるが、それだけ節まわしがねばりがちなので、重ぐれて聞こえることおもがあった。だから三番目物のやや位のある曲などは引立って聞かれるが、さうりめに運んで強く謡うべきものなどになると、あまり得意ではなかった。そういう点を古鍛冶少年は無遠慮に直したが、なかなか直らなかった。「さん候」という一句を五度も六度も先生にやり直させている所を見て大いに痛快を感じたことがあった。

今では先生も他界し、尾上さんも亡くなり、古鍛冶君

も死んだ。先生のまだ一周忌にならない大正六年の六月に追善謡会を例の西神田倶楽部楼上で、坂元雪鳥、安倍能成及び小生の肝煎で催した。その時は尾上さんも古鍛冶君も健在で、宝生さんと一緒に出席して援助してくれた。番組は左の如くであった。

素 謡

寒川鼠骨

鶉

飼

篠原温亭

三苦落魄居

境野 正

通

盛

安倍能成

高野金重

永田博

小宮豊隆

蟬

丸

野上豊一郎

島田青峰

山

姥

坂元雪鳥

山崎樂堂

藤

戸

籙子

池内信嘉

融

坂元雪鳥

番  
囃子

野上豊一郎

高浜虚子

湯

谷

河東碧梧桐

仕  
舞

古鍛冶剛

船

橋

高浜虚子

囃子

歌

占

宝生新

## 番外素謡

宝生 新

安 宅

尾上始太郎

## 勸進帳

いづれも皆漱石先生に縁故のある人たちで、曲目も先生の趣味を日安にして我々が取りきめたのであった。それとももう十三年も昔話となった。（昭和四年四月）





日本文学電子図書館

---

## 漱石先生と謡

著 者：野上豊一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録  
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

---

日本文学電子図書館